# 武漢政権期及びその崩壊後の中国共産党労働政策の展開と党政治(下)

判　澤　純　太＊

（平成１２年１０月３１日 受理）

On Prewar CCP Labor Policy —under Wuhan Government and after its corruption(Ⅱ)

Junta HANZAWA*

The abrupt corruption of Fujian Government ended the CCP oligarchy which was led by Tang Ping Shang and Zhou En Lai , and which had succeeded to Zhen De Xiu's estate. They had been evidently under the revolutionary guidance of Comintern and inspired to continue the sequential abortive general strikes and riots in big cities.

Then,Mao Ze Dong rose to the top of the party's power structure using the party's turmoil. Mao's lucid tactics used the labor class effectively in the rural Chinese Soviet, and by so doing, he succeeded in constructing his own exclusive oligarchy in CCP.

key Words:CCP Labor(Ⅱ)

## ４．一九三二年一〇月「毛沢東の降格問題」の周辺

一九二七年夏，周恩来は，ボロージンが中国共産党を率いて所属していた武漢政府（同政府内で，中共側組織はボロージン〈武漢政府高等顧問〉，鉄羅尼〈ソ連総政治顧問〉，陳独秀〈中共総書記〉の三頭体制であった）において，中共中央軍事部長の職（ポスト）に就任していた．しかしながらこの時に周恩来は，武漢政府内にあっては単に「名目上」の軍事地位を占めているのに等しかった．なぜなら，コミンテルンが派遣したボロージン顧問の指導を仰いでいた武漢政府の実際上の軍事・政治権力は，唐生智・第五方面軍総指揮，張発奎・第四軍及び第十一軍長ら地方軍閥と，邓演達・総政治部維持部主任ら国民党左派勢力が基本的に掌握していたからであった（中共側では谭平山が武漢政府農政部長の職を占めていたのに留まっていた）[47]．しかし周恩来は，自らのこの初期の「名目」上の地位を手がかりにして，一九三一年一一月に，江西「中華蘇維挨〈ソヴィエト〉共和国臨時政府」[48]（それは国民党の第三次囲剿〈３１・７－９〉から第四次囲剿開始に至る迄の十ヶ月間の討伐中止期間に誕生していた）が樹立されたのを契機として，やがて中国共産党の実質的な「軍事力」の指揮権を手中にするまでに至るのであった．周恩来は翌一九三二年，第四次剿共戦（３２・６－１０）への迎撃体制を備える中で，一〇月一二日，江西省寧都における中央局全体会議において，前任者である毛沢東（毛のそれまでの主たる軍事ポストは，中国〈即ちソ区〉革命軍事委員会主席〈３１．６－３１．１０〉，工農紅軍第一方面軍総政治委員など）の後を襲い，紅軍第一方面軍

＊国際関係論　助教授

の代理総政治委員に就任した（そして周は，同一〇月末に総政治委員に昇格就任）[49]．

第一方面軍（即ちソ区の主力軍）総政治委員の地位を毛が譲った後に，江西中華ソヴィエト区の軍事機構は，以下に述べる様に，朱徳（ソ区）軍事委員会主席（一九三二年六月総指令就任）を中心に，周恩来，王家薔らに脇を固められたのであった．更に一九三三年二月以降には，既に全軍職を失っていた毛沢東は，今や臨時政府主席の地位を確保しただけで，同人民委員会主席の地位までも張聞天に取って代わられた[50]．

その後，一九三三年五月まで（即ち５月に博古，９月にリトロフが順次同体制に補完されるまで・後述），中国共産党最高軍事幹部は「周恩来，朱徳体制」と言えるものであった[51]．いや，基本的には，三四年一月の党五中全会を経て，同年末までその体制が続いたとも言えるのである．なぜなら，本稿では党臨時中央を舞台とした，三三年五月「博・周新体制」（博，周，〈朱〉）及び同年九月「リトロフ，博，周，（朱）体制」の両者を，「周，朱」軍事体制にとっての二種類の補完的バリエーションと考えたいからである．

ちなみに，政治指導的には，王明（陳紹禹）が，一九三一年党四中全会以来党総書記に就任し，前年までの所謂「李立三コース」に代わって党の名目的主導権を握っていた．なお，向忠発が三一年六月に国民党に逮捕，銃殺されたため，陳独秀，瞿秋白，向忠発と受け継がれて来た，中共内部の「コミンテルン中国支部系」（第一次国共合作系）ラインの受け皿は，この時点で王明の下に一本化することになった．

ここで，三四年末までの中共軍事体制の構成を，更にその内容を詳細に覗いて見るならば，ソ区軍事委員会主席兼第一方面軍総指令・朱徳，ソ区軍事委員会副主席兼第三軍団長・彭徳懐，政治委員・周恩来（一九三四年一月一五日中共六期五中全会党中央書記，軍事部長，同月二二日のソ二次大会では革命軍事委員会副主席），総司令部参謀長・葉剣英，政治部長・王家薔（ソ二次大会時は革命軍事委員会副主席），政治部副部長・袁国平らであった．

一九三三年五月に博古（秦邦憲・同年１月に張聞天，陳雲と一緒に瑞金入りした）が中国共産党中央革命軍事委員会委員に増補された．朱徳が前方で指揮を振るっている期間中に，一方，博古は中央革命軍事委員会主席代理に任じられた．この時「中央ソ区前方」においては，中国工農革命紅軍総司令（工農革命軍事委員会＜中央ソ区ライン＞主席）兼第一方面軍指令員は朱徳であり，また中国工農革命紅軍総政治委員兼第一方面軍総政治委員（３２年１〇月末に就任・先述）は周恩来（同３２年１〇月に中央革命軍事委員会副主席の肩書きが確認される）であった．なお，同三二年一二月，中ソ国交回復を契機に，中共「党中央」はウラジオストックから上海に戻ったのであった．次いで三三年一月，「上海臨時中央局」の主要メンバーが瑞金入りして，「ソ区」中央局と合併し，中共中央局（総書記・博古）が誕生した[52]．

次に，三三年九月には，コミンテルン（共産第三国際＜インター＞）がリトロフ（李徳，または華夫）を中共中央蘇（ソヴィエト）区に派遣して来ており，つまりこの時点で，中共中央はその軍事機構において，政治的に，中華ソヴィエト区工農革命紅軍の軍事委員会（主席は朱徳・先述）[53]を，「上海臨時中央局系」の博古（中共中央執行委員会＜定員６３人＞・書記局代理総書記，中央革命軍事委員会主席代理〈前出〉），李徳（コミンテ

ルン顧問)，周恩来（同書記局書記・ちなみに九人の書記局書記中には，項英を除いては，毛沢東，張国焘などの中華ソヴィエト政権の代表人士の名前は入っていなかった，「中国共産党一九三四年史」はその中で周恩来の中央革命軍事委員会主席を確認している)の中共中央部の「三頭政治体制」下に包み込んだと言うことが出来るだろう．しかしながら一方，そもそも毛沢東には中共中央政治局（書記局麾下）の主席職を先に占めていた経緯があり，同局の麾下に今や制度上周恩来の（中央）軍事委員会があったが，他方周恩来の方は，中国工農革命紅軍総政治委員，第一方面軍総政治委員のポストを占めたことによって，毛沢東からその「実質的」軍事指導権を全て奪権したと言えるのであった．この奪権工作に関連して，毛沢東が感じた相当な憤怒，遺恨と思われるものを，後に「遵義会議」で毛沢東は洛甫（張聞天）と組んで，洛甫が博古に代わって党書記に座るという条件で，周恩来を総政治委員から更迭したいと考えたのだ，と王明は分析し述べている[54]．

ところで，コミンテルン（在モスクワ）は，ハバロフスク国際局，上海駐華代表，駐沪（上海）全権代表（中共中央政治局麾下・また，中共中央政治局において，中共モスクワ駐在代表団主席は陳紹禹であった），中央分局のラインによって，中共に指導権を行使していた．また，リトロフにはソ連紅軍騎兵師団参謀長の経歴があり，かつ，博古とよく識る間柄でもあって，彼は博古が中共党イニシアチブへ登場（三三年九月・先述）した以後，中共中央軍事委員会において，その指揮権を思う侭に振るったのであった．

しかし，なぜ周恩来がこの様に一貫して党の中央ポストに抜擢され続けていたかについては，一九二七年三月の上海工人総同盟武装起義に際して，周が総指揮を振るっていたことを思い起こすならば，周恩来に代表される武漢政府（内共産党）系武装暴動路線と，一九二七年一二月「広東コンミューン」以来のノイマン，ロミナーゼ主導による武装暴動路線の両者が，現実政治の舞台に起こっていた政治的な李立三へのバッシング[55]（それは，一九二八年七月中共六全大会以来の向忠発による党イニシアチブを，間接的に攻撃するものであった）の蔭で，コミンテルンの対中国革命指導上の独特な手法によって，実は中共中央に対して新規な形での合致が許されたものだったと考えられるのである．ところが，同新路線について，それを一方中共の側から見るならば，それは一九二八年七月中共六全大会で確認された革命路線（ミフ路線の延長）に他ならなかったのであり，従って中共の武装闘争は，典型的には博古を迎えた後の中央軍事体制（先述）下においては，中国農村における一九三〇年代初頭に発生していた自生的武装暴動への相乗りとは切り離された，党のイニシアチブによる「独自的革命闘争」方式だと認識されていたことであろう．

さて，この新軍事体制（一九三二年一〇月を機縁とする周恩来・朱徳軍事体制，それには三三年五月，及び九月の二種の中央「三三年政治体制」バリエーションを含む）の出現に先立って，中共党中央において，項英が一九三一年に中共中央革命軍事委員会主席（同年１～５月，引き続いて～１１月副主席）から外されていたことを注目しなければならない．次いで同年一二月，第一次全国工農代表大会は「中華蘇維埃労働法」を通過させ，それによって中共は，陳雲に言わせるならば，極端に危険な「工団主義」偏重的革命指導方向に向けて走ったのであった[56]．この様な政治的動きの背景には，ソヴィエト地区にソフフォーズやコルホーズを植え付けようとする「新思考」があったと考えられる．更にそ

の様な新「革命路線」への転換とほぼ同時に，先述した様に，三二年一〇月一二日に，中共軍事委員会通令によって，中央ソ区において毛沢東が総政治委員職を剥奪されたのであった（そして同月二六日には，周恩来が毛沢東から同職を引き継ぎ，同時に紅軍一方面軍総政治委員を兼務したのであった）．

即ち，臨時党中央新「三三年」政治体制（即ち五月体制及び九月体制・先述）とは，一九二八年一一月，モスクワ（同年7月１９日中共第六期中委第一次会議）から上海に移っていた，従来の中共中央政治局常務委員会体制（向忠発，周恩来，蘇兆徴，項英，蔡和森）を，項英（３１年1月中央革命軍事委主席，３１年6月，同副主席）外しを中心に，全面的に組み替えたものであったと言えるであろう．それは当然，中華ソヴィエトの土着的革命イニシアチブ（革命的ミクロコズム）に対して，第一次五ケ年計画の産業と農業の実績上に，第二次五ケ年計画を展望しつつ，かつ，一九三三年一一月には米ソ関係を構築するに至るソ連及びコミンテルンの国際的革命マクロコズム，及びその指導下にあった中共中央が，今後の新しい革命情勢を展望し，どの様に対峙するかという戦略を念頭に置いたものだったと言わなければならない．

そして，その中国共産党新戦略が，中ソ二全大会（１９３４年1月～2月）を経た後に確定的かつ独自的革命戦略即ち所謂「下層統一戦線」方針へ昇華した状態とは，具体的には，例えば中共五中全会決議（１９３４年3月１日）「中央北方駐在代表及び河北省委に与える指令」及び「国際十三次全会テーゼに関する決定」（党中央１９３４年4月１２日）の内に見られるだろう[57]．同決定は次の様に言っている．「五中全会決議は（中共第六期）四中全会（１９３１年1月・李立三は３〇年１１月中共党政治局会議で失脚していた）の路線を忠実に実行し，李立三の半「トロツキーズム」，羅章龍派（右傾及び調和的態度をとる両面派）を糾弾し，紅軍を拡大し，遊撃戦を発展させ，ソヴィエト工作強化を決定すべきである」，と．

ところで，中華ソヴィエト共和国政権（中央ソ区）では，中央執行委員会主席団第一副主席であった項英が，一九三三年五月まで政治指導工作を中心的に行っていた．そしてその具体的な行政権については，（中央ソ区）中央執行委員会麾下の，人民委員会（３３年2月以降毛沢東に代わって張聞天が主席：先述）が担当していたのであった．この様であったならば，一九三三年五月以降（即ち秦邦憲の党イニシアチブ期）の中央ソヴィエト地区においては，張聞天（中共中央書記局書記・政治局委員）の政治的指導力が公然と進捗していたことは，当然に考えられることである．

また，先述した様に，それまで，同中央執行委員会主席団主席の毛沢東は，前方で紅軍作戦を実質的に指導し，また張国焘が第二副主席として，鄂（湖北）豫（河南）皖（安徽）蘇区を担当していたのであった．なお軍事方面においては張国焘は臨時中央の軍事委員会副主席を勤め，ソ区においては中国工農革命紅軍革命軍事委員会（主席朱徳・前出）に直属していた[58]．また彼は，一方で中国工農紅軍川陝革命根拠地・西北区革命軍事委員会（１９３２・１２－３５・５）主席も勤めていた[59]．なお，ここで，張国焘の中共中央での政治力について若干付言するならば，前言した様に，張国焘は中央書記局から（そしてその麾下の政治局からも）外れていたから，彼は言わば地方ソ区，特に西北工作専門の

ヘッドであったということが判断出来るであろう[60]．川（四川）陝（陝西）ソヴィエト（主席能国炳）が既に構築されており，張は瑞金と川陝間の枢軸で活躍することになる．

一九三五年三月に張国焘の第四方面軍は四川省西北部に到達した．五月，張は「西北連邦政府」成立宣言を発表し，この政府が革命闘争の中心であるとして，四川省全省と西北地域の赤化を提起した．田中仁が叙述する様に，同地で張国焘は，毛沢東を含む既存の党指導部の影響力を排除し，独自の新「中華ソヴィエト」の建設を目指した[61]．

なお，四川省ではとりわけ地方軍閥の苛酷な税収奪が行われており，例えば，同地方では当時名目上一九七二年分まで税金，貢納を要求されていたとする記録も残っている．その様であったならば，中国共産党が同地方を中心に幅広い「下層統一戦線」を展開し得る余地は大きかったと言えるのである．この四川，及びモンゴルにおける，ソ連勢力を背景とした中国辺境奥地を，中国共産党は瑞金陥落までに至る五次にわたる対（国民党）剿共戦の最終的退却時の後背地に想定していたと考えられる．

## 5．張聞天の失脚と毛沢東の軍事的威信の復活

さて，中華ソヴィエト政権内部において，張聞天の政治的地位(status)が突然崩れたことで，それまでの中共の「朱・周体制」が壊れ，毛沢東が国民党の第五次囲剿戦中西遷途上に，中国共産党政権を奪取する事が可能になったと考えられる．しかし，従来の研究では，張聞天（党六期五中全会で中共書記処常務委員会書記〈常務委員〉・中共中央政治局正式委員）の党内ポジションに対する注目度は極めて低かったといえるのではないだろうか．王明は「西（長）征」途上での毛沢東，張聞天，陳雲の三者関係に付いて，次の様に述べている[62]．「（西征が）四川省に入った後，洛甫（張聞天）は毛沢東の戦術は誤っていると考え，陳雲及び羅邁（李維漢）と相携えて紅軍から離脱して地下工作に従事するために上海に帰ろうと意を決した．しかし毛沢東は，洛甫が踏みとどまってくれて〈政治的領域〉で自分を支持してくれる様極力説得に努めた．結局，次の様な妥協が成立した．洛甫と羅邁とは軍に留まるが，その代わりに陳雲を上海に派遣し，更にモスクワのコミンテルンに行かせて，紅軍の援助を頼むこと」，と．

それでは，キーパースンであった張聞天は，なぜ突然，遵義会議で「毛沢東支持」にその立場を鞍替えしたのであろうか．その理由は，彼が中蘇二全大会（１９３４年1月２２日～２月７日・前出）に福建代表として参加して，その席で毛沢東に完膚なきまでに批判され，失脚の一歩手前の地位にまで堕ちていたことにあったと考えられる．

そもそも広東暴動六周年を掲げて二全大会の開催が呼びかけられたことは，当時の共産党における所謂「周恩来体制」の自信を内外に示すものだと受け取られたのであったが，しかし，その内実においては，中国共産党のイニシアチブは，上海臨時中央政府と中華ソヴィエト政府との間に，修復できないレベルの深刻な亀裂が入っていたのであった．同二全大会における奪権闘争によって，毛沢東は図らずも中国共産党の排他的，独占的な主導権を獲得するに至ったのであった．

かくして，中国共産党史上に名高い，一九三四年一〇月一六日発所謂二万五千（中国）里の長征（あるいは「西遷」「西征」ともいう．なお，一一月一〇日国府軍瑞金占領：ち

なみに，それに先んじて，一九三二年一〇月，第四方面軍主力は，鄂豫皖革命根拠地を退出して陝西省南を経，一九三三年一月四川省北に進入していた）途上において，毛沢東が張聞天，周恩来を押え込み，突如中国共産党の排他的トップの座に立つことになったと言えるのである．しかし，その奪権の過程に対する分析については，従来，二蘇大会と関連づけられた説得力ある説明がなされて来たとは言い難かった．

さて，中蘇二全大会の大会出席者の内容を考察すれば，正式代表６９３名中，江西（即ち中華ソヴィエト）１９６名，福建７９名，粤（広東）・贛（江西）６３名，閩（福建）・贛３７名，紅軍１１７名，地方武装軍１３名，湘（湖南）・贛４３名，閩・浙（浙江）・贛４５名，湘・鄂（湖北）・贛３〇名，鄂・豫（河南）皖（安徽）１名，四川１名，非ソヴィエト区域１７名，少数民族（満州人民革命軍代表・朝鮮代表・台湾代表）３名，中央政府４８名等であった．続いて大会主席団の選挙が行われた[63]．

主席団七五名のうち，ここでは江西省（中蘇）と福建省の関係を取り上げて見よう．江西のめぼしい代表者としては，毛沢東，秦邦憲，項英，劉少奇がいる．そして福建代表としては，張聞天，陳雲がいたのである．なお，周恩来，王稼薔の臨時中央ラインの身分は紅軍の所属になっていた．

所謂「福建問題」（福建＜中華共和国＞人民政府１９３３年１１月樹立））が取り上げられたのは大会第四日目の一九三四年一月二六日と，翌第五日目であった．福建代表一二〇余名（候補代表を含む）．第四日目に第二招待所において分組討議をしたが[64]，その内容は第五日目に総括された．即ち福建代表は，「省ソヴィエトが下級の実際情況を理解せず，最も濃厚な錯誤主義の傾向にある」，「成績はきわめて不良，赤軍拡大・突撃運動は恥ずべき流産に終わってしまった」と総括した．

次に，毛沢東が同日，一連の各ソヴィエト区代表者による総括の最後になって，中華ソヴィエト中央執行委員会主席として，嵐のような拍手のうちに登壇した．毛は福建人民政府問題を次の様に定義，総括し批判したのである[65]．

「私は報告中において，福建人民政府は反動統治階級の一部分の出現である，将に死に臨んでいる自分の運動を挽回しようとして，民衆を欺瞞するためにつけた新しい模様に過ぎないことを指摘した．彼らはソヴィエトが彼らの仇敵であることも知っている．しかし国民党の看板はあまりに陳腐であるため，人民革命政府と称して，第三条の通路を叫んでいるのである」．加えて毛沢東は，当然張聞天が主催していただろうと考えられる，両日の福建分組会の総括を虚言だと批判し，かつ福建の工作人員が皆日和見主義者であるという見解に同意したのであった．

そして，次に，毛沢東の所謂福建問題に関する確定的な政治的立場は，以下に記す二点に総括され，それらはいずれも大会第一一日目（２月７日）に提出されている．

第一点は，「福建評価」についてである．彼は次の様に言う[66]．「一切の反革命的改良主義的分派は，例えば生産大衆党，第三党，社会民衆党，AB 団乃至陳独秀取消派は曽て福建省において殖民地への道とソヴィエトへの道の中間に第三の道を求めんとした．が然し，かかる試みは，完全に失敗に帰した．この反革命的主義は，福建人民政府で，革命派の辞句を以って大衆を欺き，大衆真個の革命化を阻止し，巧妙な方法を用いて帝国主義

と地主資産階級の支配を維持しようとしたが，しかし事実は鉄の如く，すべては改良主義者の幻想に過ぎなかったことを証し，彼らの死刑は宣言され，僅か二ヶ月の福建〈人民政府〉の存在は，深い嘲笑と風刺を買ったのみだ．」

第二点は，中国国民党との「平和共存不可能」である．

第一一日目（２月７日）「平漢鉄路工会紀念日に対する大会宣言（毛沢東朗読）」は次の様に言う[67]．「帝国主義の走狗たる地主資産階級の代表蒋介石は，凶悪な猟犬と同様に彼の犠牲となるものを求め，一刻もソヴィエト赤軍に対する攻撃を粗略にしない．国民党政権とソヴィエト政権が先鋭に対立する現情勢下にあっては，和平と共存は絶対不可能である．」

さて，本稿第四節おいて，私は，中国共産党の二蘇大会路線が，ポスト・李立三路線（１９３０年１１月１６日のコミンテルンの弾劾を受け，１１月２５日党の中央政治局はこの指令への服従を決議し，その結果李立三は政治局から退いた[68]）として，中共の，コミンテルンの対華革命指導から離れた独自的革命路線の形成に展開する政治過程について検討して来たのであった．それは，党第六期四中全会（王明が党総書記に就任・前出）から展開して来た政治過程なのであった．それについては先に，項英（江西中央執行委員会副主席，人民委員会副主席）が，一九三〇年一一月中共上海六期三中全会で中共が国際路線と李立三路線を調和させた後，老幹部として瞿秋白，李立三と毛沢東，更に王明を繋ぐ役割を担っていた[69]．そして，その様な前提の上に立った上で，本稿の以下の部分において私が論証したいところのものは，所謂福建人民政府事件を契機に，その上記の新中共革命路線理論の独自的排他的な継承的指導権を，毛沢東が中共党内において掌握することに成功したプロセスなのである．

毛沢東によって発動された，中共福建軍に対する「政治闘争」は，結果的に，中国工農革命紅軍第一方面軍（総司令朱徳，政治委員周恩来，政治部部長王稼薔）体制に深甚な打撃を与えたと言えよう．なぜなら，同共産軍兵力八万五千人麾下勢力について覗いて見れば[70]，そのうち第一方面軍麾下では，福建方面第三軍団（彭徳怀軍団長・兵力６千），福建区第九軍団（兵力６千），及び福建東北区第十三軍等が政治的に否定されることになったのであり，その結果，残る林彪指揮の工農紅軍第一軍団（石城，寧都一帯・３３年初～３４年１１月の蒋介石第五次剿共正面）と，そして以下に本節で述べる川陝革命根拠地第四方面軍（１９３２・１２－３５・３）とが，全軍中で片肺的に，思想的糾弾からほぼ無傷で残ることになり，ここに中共党「臨時中央局系」中央・革命軍事委員会の軍事イニシアチブは，党内で完全に勢力失調状態に陥ってしまったのであった（一九三四年第一方面軍は中央革命軍事委員会と合併する）．

ちなみに，他所に展開する兵力５千以上の主なる軍団を展望すると，湘鄂赣区第六軍団１万５千，閩赣区第七軍団５千，湘赣区第八軍団１万１千，赣東北区閩浙赣軍５千５〇〇など，中央直轄江西軍１万４千を除くといずれも辺境展開勢力であった．

つまり，中華ソヴィエト及び党臨時中央が所属させていた中心的軍事勢力とは，縁辺の備えを除いては，そもそも第一軍団と福建軍の二頭立てだったと言えるのであるが，それが，「政治闘争」によって，「福建人民政府事件」を契機に，中共臨時中央政府書記局（毛

沢東は入っていない・前出）における周恩来の「卓然的」軍事イニシアチブが，毛沢東の「事実上」の軍事的影響力の前に崩され，また，それに伴って，中共福建軍関係が総じて排斥されたことによって，中国工農革命紅軍が構造的な壊滅状態に陥ったのであった．一方，「ソ区」工農革命軍事委員会（主席朱徳・前出）は，第四方面軍（総指揮徐向前）を直轄的に指揮しており（即ち，周恩来が政治委員に入っていなかった），だとすれば，この第四方面軍の勢力を背景として，ソ区工農革命軍事委員会のイニシアチブが，党中央に対して対抗的に急速に浮上して来たことは，当然に想像されることであろう[71]．

さて，私はここに，本節の以上の論述において，中共党内における第四方面軍が政治的に突出する過程について検討して来たのであった．確かに私は，福建政府事件を契機とした，現状における「現実的」（即ち相対的）軍勢バランスの観点から，毛沢東・中央ソ区中央執行委員会主席・系統の軍が中共党内で生き残る政治過程を検証して来たのであるが，しかし，私は一方で，同事件をめぐって毛沢東軍事勢力が「理論的」に傑出した軍事統帥権を握る政治背景については，未だ明らかにしてこなかったのである．それについても，中国的政治世界における特殊な政治技術が動員されていたのであるが，その技術については従来学問的な注目は払われて来なかった．毛沢東は彼の卓然的軍事統帥権を不可逆的に固定するために，どの様な政治的理論装置を使ったのであろうか．その答えは「工会問題」であった．以下にそれを検討して行きたい．

## ６．中華蘇区と工会の関係
## —劉少奇の労働政策的党イニシアチブの始動—

武漢政府中の武漢左派と中共との決裂（１９２７年７月５日武漢反共会議）が，中国職工運動の一大転機になったことには間違いあるまい．それまで中国共産党初期の労働運動は，武漢政府の強力なイニシアチブを背景に，大々的に展開していたのであった．一九二六年五月一日，第三次全国労働大会は，組織労働者１２４万人，６９９の工会組織を代表していた．その５〇２人の大会出席者は，３５人の執行委員を選出したが，その中には，蘇兆徴，李立三，項英，劉少奇がいた．ついで，翌一九二七年二月二〇日，中華全国総工会は代理委員長に李立三を選出し，秘書長に劉少奇を選出した．また，同二七年三月一三日には，武漢政府では譚平山が農政部長職を，蘇兆徴が労工部長職を取った形で，共産党が武漢政府の労農政策を，今やすべて取り仕切るに至ったのであった．そうであるから，一九二七年三月二一日一二時からの中共上海区委制訂第三次武装蜂起計画（前出）に基づいた工人総同盟ゼネストには，総指揮をとった周恩来は８〇万人の工人（労働者）を動員し得たのであった．そもそも，かつて三年前，一九二四年三月二二日，上海商業連合会の成立が中華総工会の母体になっていた．

しかしながら，第三次囲剿（１９３１・７－９）の魁として，一九三一年六月一五日のコミンテルン東方局主任ヌーラン夫妻，六月二二日の向忠発の国民党による逮捕を契機に，中共の労働フラクションは総凋落期を迎えた．そして，指導者李立三は，一九三〇年一一月，この党路線の行き詰まりの責めを負って，早くも既にコミンテルンによる弾劾を受けていたのであった（前出）．その前に，同年八月，赤色職工国際第五次代表大会（モスク

ワ）に，劉少奇団長等３〇余人総工会人が，モスクワ（コミンテルン）との間で，中国共産主義労働運動に関するコンタクトをとっていたことが，一方で注目されよう．中共は一九三二年三月一四日，臨時中央政治局指令として，中共中央職工部部長に中華全国総工会党団（フラクション）の改組を命じている．

一九三一年一一月一四日江西中華ソヴィエト誕生（先述）．

この前後の時期について，いくつかの中共資料による中共フラクションの白色地域における凋落衰退の事態を観察しておくことにしよう[72]．例えば，一九三〇年九月一二日「少年国際致中国団关于中国工会運動中的任務的信」によれば，当時の全ての（中国）赤色工会６４〇〇会員のうち，青年は四〇％で，その大多数はフラクションに参加していなかった．総じて言えば，一九二九年九月から一九三〇年一〇月の間，ソヴィエト区域内の赤色工会会員は１〇万人に増えたが，白色区域の会員は大幅に減少していた[73]．あるいは，一九三一年四月一九日『毎日実報』劉聞「向前開展的上海工人闘争」によれば，上海の工人闘争は自発的なものがその大部分であり，黄色工会は二三％，赤色工会に至っては一二％に過ぎなかったとしてある．また，当時の中国工人運動の地域も限定的なものであった．それらは安徽，福建，広東，江西，湖南，湖北，四川，等の地域に限られていたのであった．

また，三二年三月二一日『紅旗周報』第三一期「一九三一年職工運動的総結—中央職工部報告」が，一九三一年の中国共産党の労働運動を総括している．この凋落期時点で，赤色工会会員数は僅かに１１４８人であった．即ち，そのうち上海６６６人，アモイ７２人，ハルビン７３人，海員組合３１９人など．全国には３〇〇万の産業工人がいたが，その内中共と連絡をとっていたのは，僅かに３〇〇人に過ぎなかったと言う．

またあるいは，一九三二年二月一五日政治局通過「关于青年団工作的決議」によれば，上海での団員は４〇〇人に過ぎず，付属組織においても２〇〇余人を擁するに過ぎなかった．

しかしながら，中ソ二全大会第二日（一月二四日）毛沢東の中ソ中執委会・人委会報告は，中華ソヴィエト地区内の工農問題について次の様に述べている．「この政府は労農の政府であり，それは労働者と農民との革命的民主専制を実行する」，と[74]．

ここで，毛沢東の言う労農民主専制の意味とは，いかなるスタイルの政治統治の内容を言うのであろうか．それは奇しくも，一蘇大会制定交布，二蘇大会修正の，「中華ソヴィエト共和国憲法大綱」の（四）に，次の様に規定するところのものなのである．

「プロレタリアートにして初めて農民勤労大衆を領導して社会主義を実現することを得るものなるを以って，中華ソヴィエト政権は選挙時に際し特にプロレタリアートに特殊の権利を与え，プロレタリアート代表の比例数を増加す．工人のソヴィエト政権内における地位を強化することは，ソヴィエト工作を健全ならしむるに重要なる関係を要することである．」

つまり，中華ソヴィエト区における毛沢東の政治支配権の復権—それは周恩来が「福建人民政府問題」によって党内で失脚したことによって実現したもの，私はその機を，コミンテルン・サイドについて言えば一九三三年一二月のコミンテルン第一三回プレナム，及

び一二月一五日付インプレコールに見ている[75]—によって，毛沢東はとりわけ中華ソヴィエト区内の「工人ネットワーク」（それは「中華全国総工会第二期執行委員会指導団」イニシアチブ，つまり，項英・劉少奇ライン）と，そのネットワークを優先集団として扱うこと（その卓然性は今や白色区域の工人フラクションの衰退によって，一層際立つことになった）の憲法的保障，及び各単位への配属人事権を握ったのであった．

本稿で既に述べて来た様に，中共はポスト・李立三期に，武漢政権から継続していた周恩来の党イニシアチブが，福建問題（１９３３年１１月・前出）をめぐって崩れた前後に，中共は全中国的な労働フラクションをほぼ全く手放してしまった状態にあった．その中で毛沢東は，中華ソヴィエト区内に残った工人フラクションを，「政治装置」として効果的に利用したのであった．

所謂中国幣制改革（１９３５年１１月４日）の直前の時期であった．中国では工賃の減少と労働時間の増大現象は著しく，加えて，例えば国民党の苛捐雑税は１６７８種にも上っていたと報告されている[76]．仮りに外部環境がその様に劣悪であれば，中華ソヴィエト内で，ある限られた数的スケールの工人層に対して，かなり進歩的な労働政策を採ることは，経済的にそれほど採算の取れない話ではなかったであろう．そして中共は実際に中華ソヴィエト区内でそれを実現したのであった．

そして，毛沢東は更に，工農革命紅軍に対して，同軍は労働者と農民の協調する軍隊でありながらも，その中でも労働者が革命の理論的「前衛」として比較上優位の立場にあると言う「イデオロギー的」定義を下したのであった（ただし，一九三二年一月以後，ソヴィエト内では，全般的「現実的」状況としては農民専制の政府化していたが）．この極めて特殊な労働階級優越論の淵源に付いては，先述した，陳独秀に対する瞿秋白の思想的立場（労働階級の理念化・神聖化）を想起してもらいたい．つまり，この「先例」の存在が，毛沢東の中華ソヴィエト内での新統治システムに，実に効果的に機能したのであった．毛沢東は更に，中華ソヴィエト区域内の一握りの工人軍事勢力を，理念的に紅軍模範軍隊に仕立てることに成功した．例えば，中央ソヴィエト区所有の三軍団（第一一，一五，一九軍団）のうち，二個師団は労働者と日雇い人で構成される師団であり，また，「国際青年同盟師団」と名づけられた，党員もしくは青年同盟員の構成する一師団もあったと言う[77]．（これらの特徴ある軍事単位の所有は，その後所謂「福建事件」が生起した際に，親共勢力との提携打ち切り論を主張する自信の根拠になったであろう．）そして，それを完璧に翼下において指導することによって，全紅軍を象徴的にかつ統一的に号令一下革命的に指導する軍事指導システムを，中華ソヴィエト区域内に構築したのであった．また，「人事」上，「比較」上の優位のレベルについては，毛沢東がそれらの匙加減を決定する，絶対的な政治的立場にいたのである[78]．

更に，中華ソヴィエトの縁辺地区独立に関する「憲法大綱第十四条」（一九三二年第一次全国ソヴィエト大会発布）は，次の様に規定していた[79]．

「中国ソヴィエト政府は中国内の少数民族の民族自由権を承認す．その範囲は各民族が中国を離れて，自己の独立自由国を建設することに及ばしめる．蒙古人，回教徒，西蔵人，苗族，黎族，朝鮮人等の中国国内に居住する者は，彼らが中華ソヴィエト連邦への加入，

ソヴィエト連邦よりの脱出，自己の自治区域建設に就いては，悉く各民族の意志に依って決定せしむ．」

つまり，中共はこの縁辺独立の承認を公言することによって，縁辺（hinterland）地域に，中共が縁辺に後退する機のために，中共に与する勢力をあらかじめこしらえておこうと意図した様に考えられるのである．蒋介石による揚子江中流域展開中心の金融再編の大波が進行するさなか，縁辺の弱小金融システムは，ガラガラと音を立てて崩壊しつつあった[80]．経済的に不安な縁辺地域の政治的「遠心力」こそが，自らの退出用「後背地」を確保する上で，中共にとって絶対の安全保障となるはずのものであった．また，その際農村地域の広大な政治空間が，上海中心震源の金融経済の展開に対峙する時，ますますその比重を重くしたことによって，事実として中華ソヴィエト内では農民専制傾向が否も応もなく台頭し（先述），その中で毛沢東は一見奇妙にも，ますます「工人優先」を安心してその思想中で「理念化」し，かつ対象の実態を自らの政治的利害に合わせていかようにも「操作化」し得るのであった．

ところで，周知の様に紅軍の本質は本来地方的農民軍であったため，それらを党中央が農民基準で統率するのであってみれば，各地域ボスの支配を突き破ることはなかなか容易でなかっただろう．しかしながら，もし工人基準で統率するのであれば，そのネットワークは，中華ソヴィエト内においては，今や主として劉少奇が統括していた．ここに，現有紅軍に対して持つ毛沢東の隠然たる勢力に加えて，軍事組織面において更に，中共中央の周恩来書記局（周恩来は一九二八年七月中共第六期一中全会体制＜主席向忠発，委員周恩来，蘇兆徴，項英，一九二八年一一月李立三補入＞下に，一九三〇年一一月コミンテルンの弾劾に晒された李立三を結果的にいわば見殺しにしていた）に対抗，凌駕する，毛沢東〈政治局主席〉・（項英及びその後継者的地位にいた）劉少奇〈同じく政治委員〉のラインが出来上がって来たと見ることが出来るのであった．なお，ここで重ねて述べるならば，コミンテルンは福建事件をめぐって，遂に福建人民政府切り捨てへの三三年一二月の方針大転換（後出）を経たことによって，最早従来の周恩来の後ろ盾となる権威と能力を，対中国新革命指導（いまや，一九三二年四月一五日の「対日戦争宣言」以来，抗日政策の優先が中共内部で確認されていた）において喪失してしまっていたのであった．

さて，毛沢東が中共党軍事機構（中華ソヴィエトにおける工農革命紅軍）を周恩来から奪権した政治プロセスについては，以上の様に分析出来るであろう．

福建人民政府支援問題につき，それと絡んだ中共党内の政治闘争の進行は以下の三段階をたどったと考察されよう．

第一に，一九三三年一一月一五日『紅旗週報』第五二期所載の論文「国民党軍閥対十九路軍抗日士兵的酷刑和屠殺」の論調を見れば，同論は十九路軍を擁護する立場を取っていた[81]．これは中国を「資本主義的革命」段階と捉える見方に立って（ソヴィエト革命と捉える見方を取らない），抗日と民主に対する中間階級の要求を評価し，抗日統一戦線を組織するという政治路線であり，即ち一九二八年二月のコミンテルン第九回プレナムの延長上に立つ立場であった．まず周恩来及びソ連留学生派は，同政治路線により毛沢東を「留党観察」の処分に付したのであった．

ところが，第二に，一九三三年一二月のコミンテルン第一三回プレナムを見れば，同論は「福建省の軍事指揮官蔡廷锴は，この大衆の国民的反帝国主義的精神を利用して，彼自身の利益と彼を援助しているイギリス帝国主義の利益のために動かそうとしている．」，と十九路軍を糾弾していた[82]．また，一二月一五日付け「インプレコール」は，「福建軍閥は，アメリカ及びイギリス帝国主義の指導下にその独立を宣言した．…・彼らの主人即ちアメリカ及びイギリス帝国主義に奉仕するものである．」，と福建人民政府を批判した．ここに我々は，ソ連の立場が，国際的実力の飛躍的向上を背景として，中国革命を「資本主義的革命と見る立場（コミンテルン第九回プレナム路線）から，一九二七年一二月のソ連共産党第一五回大会におけるスターリンの立場に戻ったことの証拠を見るのである[83]．

先にスターリンの中国「資本主義革命」路線（一九二八年二月コミンテルン・テーゼ）に則り，毛沢東を「保守主義者」あるいは「遊撃主義者」として吊るし上げて来た周恩来，及びソ連留学生・党中央幹部らは，この様にコミンテルン側の「中国革命のマクロコズム」観が転換した時，どの様に我が身を処せば良かったのであろうか．先の毛沢東糾弾政治闘争が熾烈であっただけに，その「カウンター・ベイリング（揺り戻し）闘争」もまた凄まじいものだったことが予想されたのであった．我々の目に付く限り，一九三四年一月に，毛沢東が招集した中共六期五中全会において，秦邦憲が行った「目前の形勢と党の任務」決議こそ，ソ連留学生派の翻身スタイルの典型ではなかっただろうか[84]．同決議に言う．「十九路軍が公然掲げた旗幟は，国民党の外衣を脱ぎ捨て，所謂人民政府を創立し，一種の『左的』革命の空言及び勝手な宣伝をしたが，…・彼らは決して帝国主義及び地主資本階級の統治を転覆させるためにしたものではなく，この統治を支持し，中国民衆が反帝国主義の民族解放闘争にかつソヴィエト道路を邁進しようとするのを妨害阻止しようとした」，と．しかし，どの様に抗弁しようとも，ソ連留学生派たちがイデオロギー的に破産したのは明らかであった．

そして，最後に毛沢東が政治闘争に勝利したのであった．なぜなら，第二段階で復権すべき李立三派が，李立三の失脚とともに，李立三派の組織再興がならないまま，第一段階の政治闘争の覇者であったソ連留学生たちが，党内で既に失脚してしまっていたからであった．加えて，中共はその後，労働運動からほぼ完全に撤退して，政・軍路線を全面的に農民を主体としたパルチザン闘争に切り替えなければならなかったため，農民闘争を一貫して指揮して来た毛沢東の政治基盤が盤石なものとなった．そうであれば，ここに一九三五年一月「博古（秦邦憲），周恩来，李徳（リトロフ）体制」が黔北（貴州省北部）「遵義会議」で崩れ，毛沢東の政治指導が逞しく台頭して来ることは必然だったであろう．毛沢東は同会議後に中央政治局常任委員に新しく選任され，「政治局主席」という新設の地位が彼に与えられたのであった．なお，党書記には，博古を辞めさせた後，張聞天が就任した[85]．一九三六年一二月七日に改組された中央革命軍事委員会は，毛沢東，朱徳，周恩来，張国燾，彭徳懐，任弼時，賀龍らがそのメンバーであった．

即ち，中国独自の「延安（政・軍）体制」が，ここに誕生したことが見てとれるのであった[86]．

## 注

(47)『近代日中関係の基本構造』二三八頁.

(48)曹伯一『江西蘇維埃之建立及崩壊』国立政治大学東亜研究所，一九八三年.

(49)同上. 『中華人民共和国職官誌』中国社会出版社. 三四四頁.

(50)『中国共産党名人録』四川人民出版社，張聞天の項. また，当時の中華ソヴィエトの内情と党団の関係に付き，『現代支那之記録』燕塵社，一九三二年三月，二四一－二四二頁.

(51)『近代日中関係の基本構造』二三九頁.

(52)田中仁「中国共産党の組織再編をめぐる一考察（一九三四－一九三八）—政党，軍隊と「国家」—」『アジア研究』第四四巻第四号，四頁.

(53)「中国共産党組織系統表」『中華人民共和国職官誌』一六頁.

(54)高田爾郎等訳『王明回想録』経済往来社，一九七六年，四〇頁. 李立三へのバッシングはどの様な環境で起こっていたのか. 彼を取り巻く主たる政治アクターたちの政治スタンスが重要に影響していることが，一九二七年三月上海蜂起をめぐって象徴的に明らかになるであろう. まず当時，陳独秀は，張作霖，蒋介石，上海西山会議派の三極の中で，中共独自の連ソ軸を確立することが最大の関心事であった（「評蒋介石三月七日之演講」『响导週報』第一九二期）. また，コミンテルン（ 'The Horrible Wholesale Murder by 'Civilised' Barbarians in China' *International Press Coresspondence, vol.7, No.22*)は，全世界の労働者階級組織（当然黄色，紅色双方組織を含む）に支援のメッセージを送っていた. その中で中共中央は，三月二一日ゼネストにおける上海労働者階級（当然紅色労組）の武力闘争を，中国革命史上において最も価値ある武力闘争と定義したのであった（「中国共産党为此上海巷戦告世界工人階級書」『响导週報』第一九三期）. つまり，後に李立三バッシングの裏での周恩来の政治的引き上げは，紅色労働組合による武装蜂起路線の選抜だったのである. これが後に中華ソヴィエト期になると，後に述べる様に，中華ソヴィエト内での労働者優遇理論に転換するのであった.

(55)『近代日中関係の基本構造』二一五頁.

(56)陳君聡『劉少奇的思想理論研究』華夏出版社，一九八八年，六四二頁.

(57)『中国共産党一九三四年史』外務省情報部，一九三五年，七九五頁. （以下，『一九三四年史』と略称する）

(58)同書，六七一頁.

(59)同上.

(60)呉相湘『中国共産党之透視』第三輯，文星書店，一九六二年，一九五頁.

(61)「中国共産党の組織再編をめぐる一考察」前掲論文，七，九頁.

(62)『王明回想録』前掲書，四一頁.

(63)『一九三四年史』六八－七二頁.

(64)同書，九四，九五頁.

(65)同書，一〇一頁.

(66)同書，一二三頁.
(67)同書，一二一頁.
(68)『近代日中関係の基本構造』前掲書，二一四頁.
(69)同書，二三一頁.
(70)「中国工農革命紅軍組織系統表」
(71)「中国共産党組織系統表」，『中華人民共和国職官誌』三五〇頁，三六八－三六九頁.
(72)波多野乾一『中国共産党史』第四巻，一九六一年，時事通信社，七三八－七六〇頁.
(73)『第二次労働年鑑』第二編，前掲書，三六五－三六七頁.
(74)『一九三四年史』七七頁.
(75)『一九三四年史』羅明コースの転覆に付いて四〇〇－四〇七頁．拙稿「ロミナーゼをめぐる周恩来と毛沢東」『政治経済史学』第二〇七号.
(76)「江西蘇維埃関係資料」『陳誠コレクション－１７』
(77)『第二次労働年鑑』前掲書，三六五－三六七頁.
(78)例えば，中華ソヴィエト区の種々の内情に付き，呂星斗編『劉少奇和他的事業』中共党史出版社，一九九一年，一九五頁．董必武『中国解放区実録』合作出版社，一九四六年，三八－三九頁，陳紹畴『劉少奇在白区』，一五〇頁などを参照．中華ソヴィエト一全大会の選挙条例によれば，９特区の代表２４９名の選出枠は，工人３０，軍（紅軍）２４，貧農５，民農１９０の比率であった．これによれば，毛沢東が工人と軍を押さえている限り，彼は手勢として常に３０＋２４＝５４票を基礎票として持っていたことになる．それはつまり，総票２４９票の四分の一以上なのであり，これによって毛沢東に対する対抗的リーダーは出難くなっていたと考えられる．『江西蘇維埃之建立及其崩壊』前掲書，七〇－七一頁．この選挙は，ソヴィエト区内に選挙によらずに上級ソヴィエト政府が作られ，コミンテルンに近い勢力がそれによって土着勢力を支配する方式が生まれることを防いでいたと考えられる．『中国労働運動史』（上），前掲書，三四五頁．「目前幹部政策几个問題」『共産党人』第三期，一九三九年一二月は，地方委レベルで工人幹部の割合が四・四パーセントと異常に欠乏していることを訴えている.
(79)『一九三四年史』一九八－一九九頁.
(80)呉承禧「民国二四年度的中国銀行界」『中国国民経済』二四八－二四九頁.
(81)『近代日中関係の基本構造』二四〇頁.
(82)同書，二四一頁.
(83)同上.
(84)同上.
(85)竹内実『毛沢東と中国共産党』中公新書，二八二，一〇四頁.
(86)『近代日中関係の基本構造』前掲書，二四一頁.